

自分の遺骨を抱かされて

青森県 福 真 吉 次

私は、大正六年一月十六日、弘前市に父・晴吉、母・くりの次男として生まれました。父は小学校の教員でした。

昭和四年三月、千年尋常高等小学校を卒業、さらに県立弘前中学校に進学しました。

昭和九年四月、弘前中学校を卒業と同時に、ふとしたことで通信省飛行機操縦生としての訓練を受けるため土浦海軍航空隊へ予備練習生として入隊しました。十八歳の時です。入隊と同時に海軍予備一等航空兵を命ぜられ、一般入隊者と同じ教育を受けることとなりました。

入隊したのは約八〇人（同期生）ぐらいでしたが、そのうち卒業したのは二八人で、パイロットの卵となり、引き続き半年ぐらい大型機の訓練を受けた後、昭

和十年六月ごろ、大日本航空株式会社（現在の日航）に入社しました。

同社では主として羽田―福岡―沖縄―台北の定期便の副操縦士として勤務し、お天気の良い日はこの航路を毎日の往復で、東京と台北の二カ所に下宿を持っていました。定期便の仕事は、主として航空便とお偉い人の輸送で、一般の方の旅客はほとんどありませんでした。定員二十四人のダグラス機で、今日ではお話にもならない旧式の双発の飛行機でした。

前記の練習生時代は十六円五十銭の小遣いだったと思います。大日本航空に入社したら月給百二十円ぐらいとなりました。当時私の父が小学校校長で月給が八十五円ぐらいだったと思いますので、二十歳そこそこの若僧としては大変な高給で驚きました。

また台北から、冬季の内地では手に入らないキヌウリとかナス、果物などを内緒で運び、また内地からは台湾では入手できない品を運び、これで飲食店、カフェ代はおつりがくるといふ優雅な生活でした。

このような生活も短い期間で日支事変が始まり、昭

和十三年一月には、海軍予備三等航空兵（下士官）として木更津航空隊に徴集を受け、今度は本物の爆撃機で兵機砲のことなどの訓練を受け、三月には上海基地へ移動、戦争というものの真っ只中に入りました。そして訓練とは異なって本物の弾が飛んでくるのにはキモをつぶしました。その後は、南京、北京、漢口、海南島、仏印、ハノイ、サイゴンなど転々と基地を移動して、満州以外でしたら支那全土の爆撃に参加しました。

昭和十五年四月二十九日、第一回論功行賞で「殊勲甲」ということで「功六級金鷄勲章」と「勲七等」および千五百円也を下賜されましたが、この千五百円は未だに国に貸したままです。

当時、どうせ帰れないのだから予備士官をとって現役になって任官した方が良いと勧められましたが、今に民間に帰れるものと信じつつ、いつまでもそのままにしてありました。しかし、昭和十五年、海南島から台湾高雄航空隊に転属となり、サイパン、トラック島基地行きを命ぜられ、ソロモン島南方方面の地図作成

の偵察作業に入り、これでは生きて帰れないものと思いい、とうとう現役を志願してやっと任官（海軍予備少尉）しました。最初から現役になった方々とは大変な階級の差ができてました。その後は、制度が変わって私たちのような者は最初から海軍予備少尉となりましたが……。

いよいよ大東亜戦争に突入しますが、十二月八日當時は、高雄空から陸海軍戦爆合計約三〇〇機で比島マニラ地区の敵機を攻撃、この一度の攻撃で在比米軍機の八割を撃墜および炎上させ、わが方七機の被害という、全く驚く戦果で連戦連勝の戦でした。

さて、十二月中旬にはマニラ基地に進出、マッカーサーのいるマニラ湾のコレヒドール島を爆撃し、さらに基地をホロ島に進め、ボルネオ、ジャワ島を攻撃、さらに昭和十七年一月二十七日ころにはトラック島からラバウル上陸戦の掩護爆撃に参加しました。この日、陸軍および海軍陸戦隊はラバウルに上陸、敵飛行場を手に入れたとの報で、穴だらけのラバウル飛行場に私ともう一機が着陸しましたが、敵さんの兵舎の食卓に

はまだパンとかミルクなどがそのまま散乱してしました。

そのころは私も飛行時間六〇〇〇時間のベテランの部に入り、三機編成の小隊長をしていました。

昭和十七年十二月に本格的ラバウル基地航空隊を編成すべく一度高雄に帰り、「高雄空」などから編成された陸上攻撃機十八機がサイパン、トラック島経由で二月十日、ラバウルに進出しました。未だ輸送船も間に合わず、最も効果の上がる航空魚雷も高空用酸素も届いていませんし、ジャングルの中の一本の滑走路というものしかない状況でした。第一回戦というべき戦いですが、私たちが進出して四、五日目の昭和十七年二月二十日、ラバウル西方三五〇マイルに空母を含む敵機動部隊を発見、全一七機で爆撃攻撃に出発しました。

白昼、高度四〇〇〇メートルで攻撃に入りましたが、五、六〇機のお迎えを受け、大空中戦となりました。この空中戦で、わが方の爆撃機が次々と火を発して自爆（一機のみ敵巡洋艦に突入）、一七機中

一五機の爆撃機と、隊長、中隊長以下日支事変以来のベテランの搭乗員二五人をこの一戦で失うことになり、戦争の恐ろしさをいやというほど知らされました。幸いにして私の機ともう一機は一〇〇カ所以上の被弾でしたが、どうやらラバウルまで帰投できました。

戦闘機は未だラバウルに到着しておらず、掩護戦闘機のない日中の爆撃行は全く無茶な行動ですが、これまた戦争というもので、仕方のないことです。

私の機は修理可能でしたので四、五日後には稼働できるただ一機の戦力として連日、ソロモン、ガダルカナル、モレスビー方面の哨戒飛行を続け、いささか参りました。

三月十七日ごろ、やっと内地から新しい編隊が到着もとの活気ある部隊になりました。ここで編成替えがあり、私だけは一人今までのペアを出て、他の機に移りました。その三日後、今までのペア機と二機でポートモレスビーの写真偵察兼爆撃行を命ぜられ、高度七五〇〇メートルでモレスビーに進入しましたが、敵ながら見事な対空砲火で、一撃目からドンピシャリで驚

き、ガクンとショックを受け、片舷の発動機が物凄いフラッターを起こし始めました。

その次はおきまりの敵戦闘機の攻撃が始まり、機上で三人戦死、また先日までのベア機は火を発して手を振りながら自爆されました。わが機もとうとう片舷が吹っ飛び、高度も降下、自爆せざるをえないこととなり、珊瑚海に墜落と思いましたが、着水時に機首を上げたのでしよう、気がついたら海上に浮かんでいました。

大海原に三つの帽子が見えたので行って見ると、まだ気絶したままのベアの者で、次の大スコールのお陰で生気づき、その後は四人で漂流を始めました。長い長い昼も終わり、南十字星を眺めては内地のこと、家のことなどが夢のように思い出され、「絶対眠るな」とお互いに注意し、励ましあって三昼夜を過ごしました。この間、スコールが命の綱でした。

最後は舌を噛み切って死のうとやってみましたが、痛くて駄目で、漂流四日目に奇跡的に日本の哨戒艇に発見され、艇内に引き揚げられたことまでは判ってい

ましたが、その後のことは何も判りませんが、気がついたら艇内で毛布をかぶって寝ていました。この哨戒艇は大きな船と思いましたが一〇人そこそこのキャッチャーボートでしたが、二昼夜かかってラバウル港に運んでくれました。

艇からは担架でトラックに乗せられ、基地へ届けられました。その時でもまだ、何がなんだかさっぱり判りませんでした。トラックから降ろされてやっと見馴れた指揮所へ運ばれ、ようやくラバウルだなあと思えました。

基地ではもう少して慰霊祭が始まる直前だったらしく、祭壇の上に沢山の遺骨箱が飾られていました。私を見て整備長が大声でその遺骨箱を降ろせと怒鳴ったので、慌てた兵隊が遺骨箱を降ろしてきて、担架に乗せられている私に渡してくれました。

それをよく見ると、一つ進級したものの「故」が付けられた私の名前の箱で、私は「ああ遺骨だなあ」と思い何の考えもなく抱いていました。どうもおかしいので整備長に「これは要りません」というと、整備長

も大笑いしながら「まあ、そのうち必要になるのだから大切に持っているように」とのこと。

この箱もしばらくの間は小物入れとして便利しましたが、間もなく病院船「氷川丸」で帰るとき、次の人のために置いてきました。

いまでも私は私の葬式の夢をよく見ます。そのためでしょうか、自分で自分の遺骨を抱くことはもうないでしょう。

この不時着で全身の骨がそちこち折れて、治療に約八カ月かかりました。